



商店街主催・多機関協働による 「暮らしの保健室」の実践報告

公益性を担保した医療・介護越境型「まちの小さなしくみ」の構築

第17回 日本プライマリ・ケア連合学会学術大会

山田 翔太¹、尾山 直子¹、山戸 啓佑¹

(1. 桜新町アーバンクリニック)

第17回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会 利益相反（COI）開示

演題名：商店街主催・多機関協働による「暮らしの保健室」の実践報告
～公益性を担保した医療・介護越境型「まちの小さなしくみ」の構築～

発表者名：山田 翔太1、尾山 直子1、山戸 啓佑1 (1. 桜新町アーバンクリニック)

開示すべきCOIはありません

世田谷区・桜新町エリアについて

世田谷区全図 (東京都)



東京都世田谷区・桜新町エリア

人口

10つの町内会のエリア（桜新町、新町、深沢一部、駒沢一部を含む）

約26,081 世帯／約51,276 人

（世田谷区ホームページ「世田谷区の町丁別人口と世帯数」より）

個性

ファミリー層が多く住む、サザエさんのまち。
桜新町駅を中心にした、活気のある商店街がある。
狭いエリアに多くの人々が住んでおり、絶えず人通りがある。



それぞれの課題からうまれた、暮らしの保健室

医療的な課題

医療・介護の情報が
届いていない住民の存在

医療・介護の情報と出会えず、
疾患の増悪や介護の限界まで公
的サービスにつなげなかった
住民が実際に存在。



生活のなかで、医療や介護の情
報に出会えるしくみが必要

地域的な課題

地域包括支援センターは、
立地的な行きづらさがある

地域包括支援センターに相談に
行くためには、246号線という
大通りを渡る必要があり、
高齢者は足を運びづらい。



大通りを渡らずに、医療や介護
の相談ができる場が必要

商店街の課題

新設した商店街事務所を
どう活用していくか

助成金を得て新設した商店街
事務所があり、地域貢献でき
る活用方法を模索していた。



商店街事務所で
暮らしの保健室をひらく

商店街主催×多機関協働の意義

桜新町地域の人たち誰もが、
医療や介護の情報につながりやすくなるためには



かかりつけ医があっても相談できる
「**公益性のある場**」である必要があるのでは？

商店街にある多機関の医療者、
地域包括支援センター、
商店街事務局が集まり、実行委員を結成。

桜新町アーバン
クリニック
主催



”公益性”



桜新町商店街
主催



”地域のハブ”

実行委員会設立から運営開始までの経緯

商店街主催により公益性・中立性を担保した多機関協働モデル

設立経緯のタイムライン

2022年から2025年までの主要な出来事

進行中

2022年

地域イベント救護

さくらまつり・ねぶた祭りの救護を当院が担当。
地域とのつながりが生まれる。

2024年
7月

実行委員会設立

商店街と協議し、実行委員会を設置。商店街主催
で公益性・中立性を担保。

2025年
12月

運営開始

月1回の運営を開始。コーヒー提供を呼び水に。



現在の状況

月1回の定期開催を継続中。多世代の
住民が来訪し、相談件数も増加傾向。



実行委員会構成

桜新町商店街理事、桜新町商店街に参画する診療所、薬局、地域包括支援センター等の
多機関協働。保健室開催に向けた準備及び振り返りを含めた月1回の打ち合わせを実施。

運営の枠組み

診療は行わず、地域資源へ公正中立につなぐ

開催頻度・時間

月1回

毎月第1水曜日 11:30～14:30（3時間）に開催。体組成測定とコーヒー提供を呼び水に、多世代住民が来訪。

頻度
月1回

時間
3時間

場所
商店街事務所

対象
地域住民

運営体制

3名常駐

医師・看護師・薬剤師・ソーシャルワーカーなど、多機関の医療スタッフが常駐し、相談対応をローテーションで行う体制。

常駐
3名

交代
2-3名

対応者
複数事業所

連絡
LINEやメールで随時

機能・役割

多機能

相談・傾聴と「公正中立なつなぎ役」に徹する。診療は行わず、必要時はやわらかくかかりつけ医への相談を促す。

相談
傾聴対応

紹介
地域資源

支援
見守り

記録
最小限

運営の様子



商店街主催の強みと弱み

商店街主催による多機関協働体制は「暮らしの保健室」の特性に追い風になる



広報力

商店街の各店舗でチラシ配布、振興会・町会の回覧板・掲示板を活用した定期案内



多様な利用者像

様々な年齢層が行き交う場所に構えることで、本人・介護者・若年者の困りごとにリーチ



負担分散

特定の事業所・スタッフで運営する必要がないため、各事業所の経営・運営へのインパクトが小さい



現場感覚の違い

様々な診療科・専門職が集まるため、在宅医療・プライマリケアにおける現場感覚の共通理解が乏しい



公益性意識の共有

非営利かつ公益性のある事業であることを意識した利用者への対応の共通認識が必要

→ 多機関連携の深化

→ 現場感覚の共有

多機関が協働していくための工夫

「相談対応の心がまえ」を明文化し、スタッフの意識を統一



暮らしの保健室

相談対応の心がまえ

ほっ

とする場所をつくるための

心がまえ

この「心がまえ」は、私たちが地域とつながるうえでの共通のスタンスです。皆さまと、この思いを共有しながら、あたたかい場を育てていければ幸いです。

1 医療の場ではなく、寄り添いの場

診察や治療をする場所ではなく、相談に来られた方の気持ちに寄り添い、耳を傾けることを第一に考えます。

2 アドバイスは「そっと背中を押す」くらいの温度感で

専門的な知識や経験をもとに助言することもあります。押しつけにならず、本人の意思や生活背景を尊重する姿勢を大切にします。

3 リラックスできる空気をともにつくる

医療者然とした対応ではなく、誰もが安心して話せるような雰囲気をつくりします。お茶や世間話がかきつけになるのも大歓迎。

4 紹介や情報提供は、公平に・選択肢を示す

困りごとに応じて制度やサービスを紹介する際は、特定の事業所に偏ることなく、公正中立な立場で行います。

5 「答える」よりも「聞く・共に考える」

診療や介護の正解を伝える場ではなく、相談者といっしょに考え、探すプロセスそのものを大切にします。

6 信頼を大切に、安心して話せる場

お聞きした相談内容や個人情報は、慎重に扱います。他の機関やサービスにつなぐ場合は、必ずご本人に相談し、同意を得てください。

制作まで

白十字在宅ボランティアの会による暮らしの保健室を見学し、秋山正子さんからの助言をベースに、桜新町商店街の理事のみなさんと相談しながら制作。

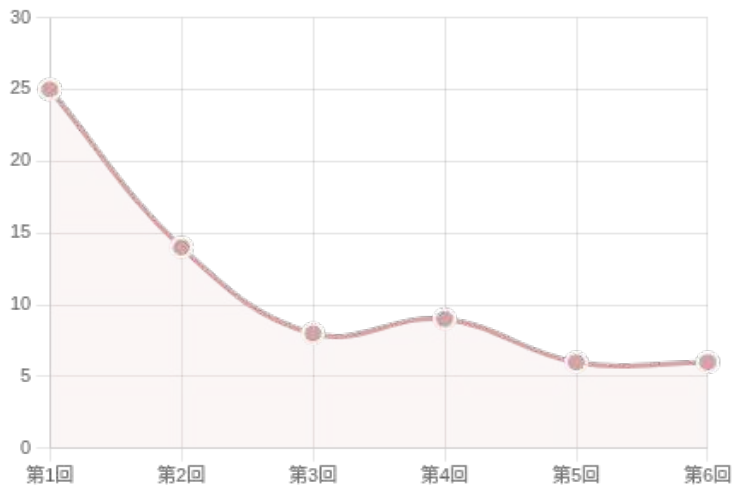
相談対応をはじめるスタッフにはまず一読していただいている。



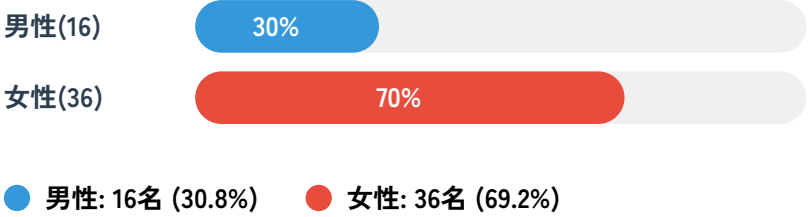
利用実績と相談パターン（2026年5月時点）

50歳以上の女性が主要利用者層で、雑談を通じた関係構築の中で健康・介護相談につながっている

来訪者数の推移（第1回～第6回）



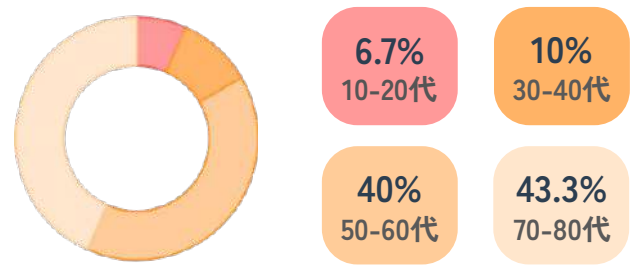
性別×相談内容比較



年齢層×相談内容クロス集計

年齢層	体調 症状	医療 介護	お薬	家族 介護	生活 福祉	雑談	合計
10-20代	1 25%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	2 50%	4
30-40代	1 17%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	3 50%	6
50-60代	6 25%	2 8%	0 0%	2 8%	0 0%	13 54%	24
70-80代	6 23%	3 12%	0 0%	3 12%	0 0%	14 54%	26
合計	16	7	2	7	2	33	60

年齢層別分布



具体的事例と対応内容

認知機能が低下している方の早期発見から若年層支援まで、実際の対応事例が示す多世代型地域包括ケアの実現



認知機能低下の早期発見

「前回来訪を忘れ『初めて来た』と発言。繰り返し同じ話をされる様子も見られ、認知症の疑い」

対応 あんすこの「ささえ食堂」を案内

✓ 地域リソースへの接続成功



精神疾患患者の不安軽減

「夜間は訪看が電話対応のみで不安が大きい。訪問診療制度についてご相談」

対応 訪問診療制度を丁寧に説明

✓ 明るい表情で帰宅、不安軽減



若年層アクセス成功

「地域の若年者が仕事や人間関係の悩み相談で来訪。2階の個室を活用し、プライバシーに配慮した対応」

対応 2階個室利用、プライバシー配慮

✓ 明るい表情で帰宅、若い人でも利用しやすい雰囲気が評価



社会的孤立対応

「引っ越し後に居場所がないと発言。認知機能も気になるが、人との関わりを強く希望」

対応 傾聴、地域の交流の場（ささえ食堂等）の案内

✓ リピー特意向の獲得、居場所としての機能発揮



詐欺被害未然防止

「家族から頼まれコンビニへ振り込みに向かう方を発見。軽度認知症の疑い」

対応 近くまで同行してサポート

✓ 地域の見守り機能、詐欺被害の未然防止



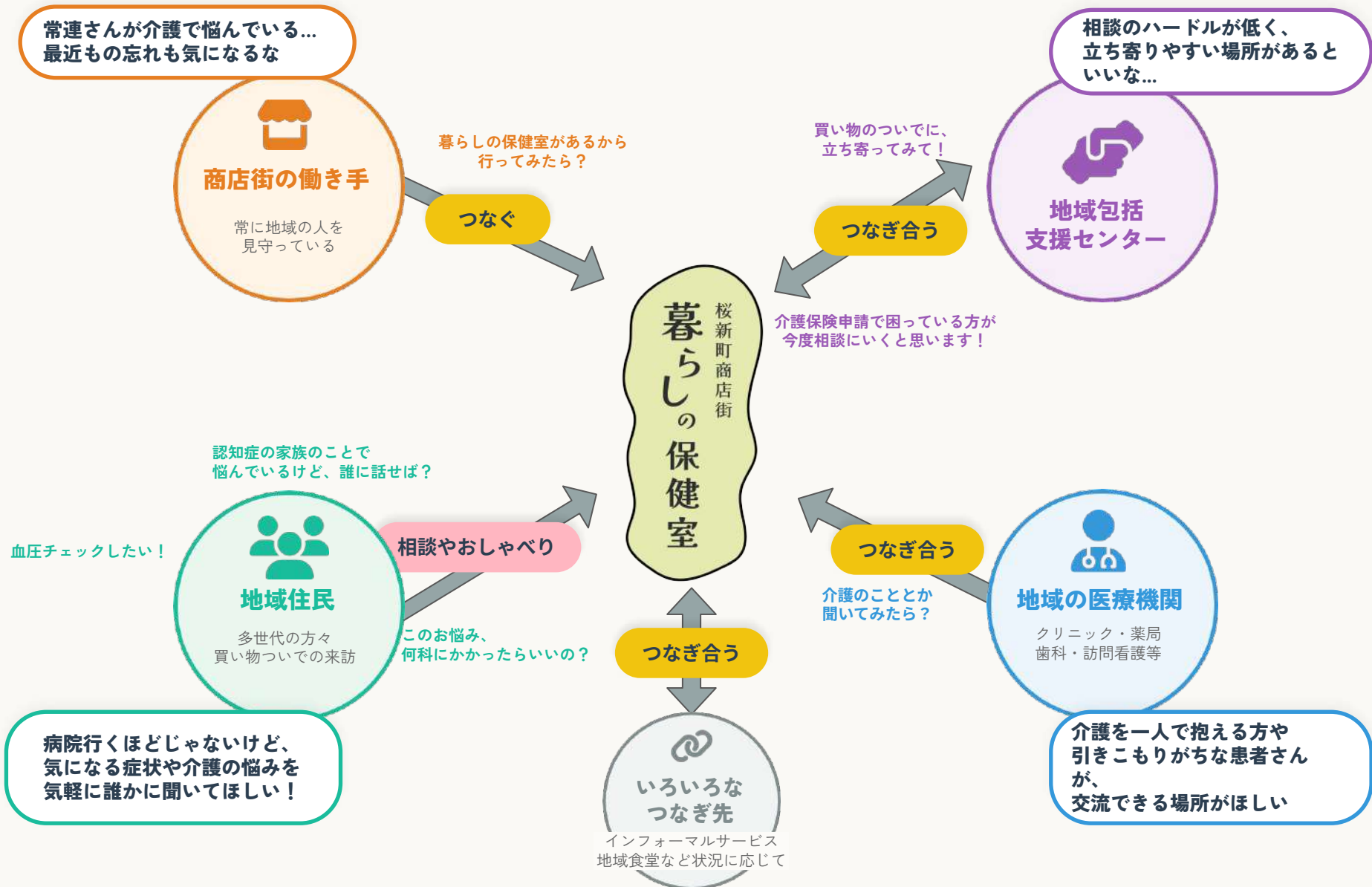
介護者支援

「ご家族の介護サービスに関する相談。一人で抱えている状況」

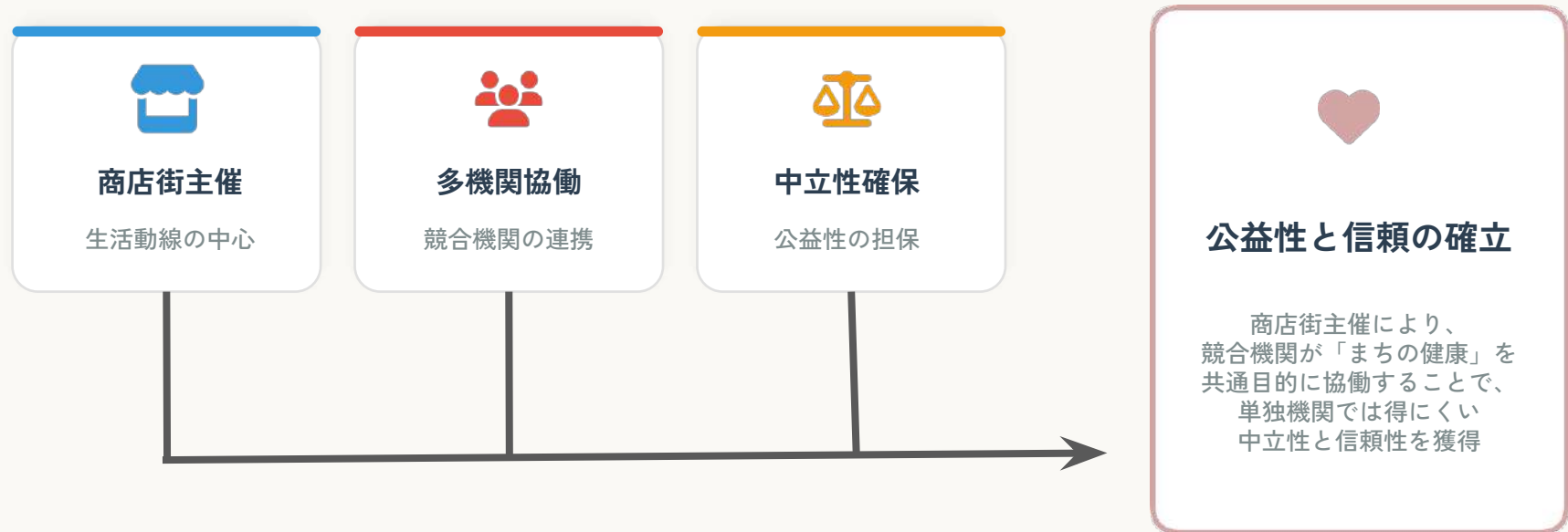
対応 傾聴、介護サービス情報提供

✓ 経験の共有、情報取得

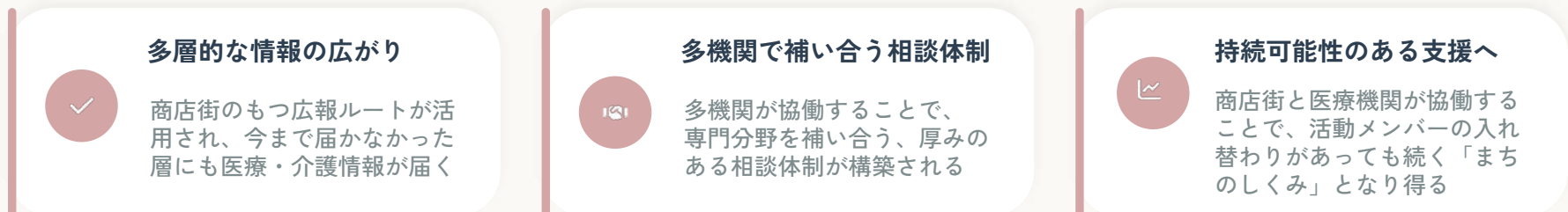
地域ネットワークの形成（ハブ化）



商店街主催の3つの要素が公益性と信頼に収束する構造



商店街主催によって厚みのある相談体制へ



商店街主催による中立的地域ハブが定着し、持続可能な『まちのしくみ』へ進化する段階へ

主要な成果

商店街主催×多機関協働の
「まちの小さなしくみ」が
定着しはじめている



中立・公平なつなぎ役として地域
ハブが実現



高齢者に限らない多世代の潜在
ニーズを顕在化し、適切資源へ接続



リピーターが生まれ、
「ふらっと立ち寄れる居場所」
になりつつある

今後の展望

暮らしの保健室が、
〈持続的なまちのしくみ〉に
なるよう、体制を強化していく



多機関にまたがる相談者の育成
心がまえの継続した共有



商店街側への活動の再周知
分野を超えた協力体制の構築



地域住民への周知の継続